本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。
著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：
UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2023 石井剛

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

東京大学教養学部学術フロンティア講義/高度教養特殊講義（東アジア教養学）
「30年後の世界へ——空気はいかに価値化されるべきか」第13回

EAA
EAST ASIAN ACADEMY
FOR NEW LIBERAL ARTS

空気の哲学としての新しいリベラルアーツへ

責任と希望の学問

July 14th, 2023

石井剛（大学院総合文化研究科/東アジア藝文書院）

1. 価値/価値化について
2. 空気の哲学
3. 空気の公共性/空気の政治
4. 空気の民主化
5. 価値論再び
6. 産学連携の意味

1　価値/価値化についてもう一度整理する

デイヴィッド・グレーバー『価値論』から

1. 社会学的な意味での「価値観（values）」——人間にとって、究極的に素晴らしく、正しく、または望ましいものについての概念。

2. 経済学的な意味での「価値（value）」——モノが欲求される度合い。特に、他の人びとがそれを手に入れるために、どのぐらいのものを差し出す用意があるか、によって測られる。

3. 言語的な意味での「価値（value）」——構造言語学者フェルディナンド・ド・ソシュールに遡る。それをもっとも単純に言い表すと「意味のある差異」になる。

デヴィッド・グレーバー『価値論——人類学からの総合的視座の構築』、藤倉達郎訳、以文社、2022年、p. 13。

2　空気の哲学

『荘子』斉物論

南郭子綦は、脇息にもたれて坐っていた。天を仰いで静かな息を吐いていた。とろりとして身体と精神の両者を失ったかのようであった。弟子の顔成子游が、前に立ち控えていてたずねた。「一体どうされたのですか。身体は本当に枯れ木のようにすることができ、精神は本当に死に灰のようにすることができるのでしょうか。今日、脇息にもたれる坐り方は、以前と違っていらっしゃいますが。」子綦、「偃よ、大変結構だね、君の質問は。今、私は我を失っていたのだが、君にそこまでは分かるまい。ところで、君は**人籟**を聞いたことがあっても、**地籟**を聞いたことはあるまい。たとえ地籟を聞いたことがあったとしても、よもや**天籟**を聞いたことはあるまいな。」子游、「どうか、その道をお教えください。」

子綦、「**そもそも大地の吐き出すおくび、これを名づけて風と言う。この風が一旦吹き起こるとなると、大地に開いた無数の竅穴が一斉に叫び始める。君もきっと、びゅうびゅうという唸り声を聞いたことがあるだろう。山林の高低のうねりが作り出す隈や、百抱えの大木にできた虚穴などの形は、人間の鼻に似ており、口に似ており、耳に似ている。あるいは、枅形に似、曲げ物に似、臼に似ている。また、大池に似たものもあれば、小池に似たものもある。風がこれらの竅穴に吹きつけ、さまざまな音を奏でると、ばしゃと水の石走るおとがあり、びゅうと鏑矢の唸りがあり、しっと叱る声があり、ひゅうと息を吸いこむ音があり、きゃあと叫ぶ声があり、わあと泣き叫ぶ大声があり、ぼうと深くこもった音があり、ちゅっと哀しい小鳥の鳴き声がある。前の竅穴がおうと鳴りかければ、後の竅穴がぐうと返す。竅穴どもは、微風にはピアノで応じ、疾風にはフォルテで応ずるが、やがて烈風も静まれば、もとの虚に返っていく。君もきっと、山林や大木が残んの風でざわざわと揺らぎ、さわさわとそよぐのを見たことがあるだろう。**」

子游、「地籟は、大地の風が竅穴どもに吹きつけて出す音声であるにすぎず、人籟は、人間が竹を並べて作った簫を奏でる楽曲であるにすぎません。どうか天籟についてお教え下さい。」子綦はこれに答えて言うのであった。「そもそも大地と人間の吹き出す音声は、無数に異なるけれども、何者かがそれらに自ら音声を出させており、そのために、**大地も人間も全て自ら主体的にあれこれの音声を選び取っているのだ。そのように仕向けているのは、一体誰であろうか。**」

池田知久訳注『荘子（上）　全訳注』、講談社、2014年、110-112ページ。

“天墜未形，馮馮翼翼，洞洞灟灟，故曰太昭。道始生虛廓，虛廓生宇宙，宇宙生氣。氣有涯垠，清陽者薄靡而為天，重濁者凝滯而為地。清妙之合專易，重濁之凝竭難，故天先成而地後定。天地之襲精為陰陽，陰陽之專精為四時，四時之散精為萬物。積陽之熱氣生火，火氣之精者為日；積陰之寒氣為水，水氣之精者為月；日月之淫為精者為星辰，天受日月星辰，地受水潦塵埃。”

–『淮南子』天文訓

「正処」、「正味」、「正色」の不在

試しに君にたずねてみよう。人は、湿地に寝起きしていると、腰痛を病んだり半身不随で死んだりするが、鰌はそうはならない。樹上に住むとすれば、びくびくと恐れぶるぶると震えるが、猨猴はそうはならない。この三者の内、どれが正しい処を知っていることになるのだろうか。人は牛肉・豚肉を食べ、麋・鹿は甘草を食い、蝍且は蛇をうまいと言い、鴟・鴉は鼠を好む。この四者の、どれが正しい味を知っていることになるのだろうか。猨の雌は狙の雄が追いかけ、麋は鹿と親しく交わり、鰌は魚と遊び戯れる。毛嬙や麗姫は、人が誰しも美しいと思うところである。しかし、彼女らを目にするや、魚は水底深く隠れ、鳥は空高く舞い上がり、麋・鹿はさっと逃げ出してしまう。この四者の、どれが天下の正しい美を知っているのだろうか。

池田知久訳注『荘子（上）　全訳注』、講談社、2014年、189ページ。

至人

至人は霊妙な力の持ち主だ。たとえ**大きな藪澤が焼けても至人を熱がらせることはできず、黄河・漢水といった大河が凍りつく気候でも、彼を寒がらせることはできず、烈しい雷が山を打ち砕き、大風が海を揺るがす事態も彼を驚かすことはできない。**

池田知久訳注『荘子（上）　全訳注』、講談社、2014年、190ページ。

天倪に調和する（和之以天倪）

天倪（自然の区分）において調和するとはどういうことだろうか。あらゆるものには「是」もあれば「不是」もあるし、「然」もあれば「不然」もある。「是」が果たして本当に「是」であるなら、「不是」とは違いがあるのだから、弁論するには及ばない。「然」が本当に「然」であるなら、「不然」とは違いがあるのだから、弁論するには及ばない。生死や年齢のことなど忘れてしまい、是非や仁義のことも忘れてしまい、終わることのない境涯に遊ぶのだ。

陳鼓應注釋《莊子今注今譯》上冊，北京：中華書局，1983年，90ページ

生成変化と物化

3　空気の公共性、または空気の政治

貧困層ほど暑くなる

- ニューヨーク市における調査
- 高温による死者の人種特性

Anne Barnard, Corey Kilgannon, Jazmine Hughes and Emma Goldberg, “It’s Going to Be a Hot Summer. It Will Be Hotter if You’re Not Rich.”, New York Times, May 28, 2022, https://www.nytimes.com/2022/05/28/nyregion/heat-waves-climate-change-inequality.html.

4　「空気の民主化」に向けて

カタール・ワールドカップの教訓

「8つのスタジアムを1年でたった3ヶ月使うことを持続可能性の立脚点に据えるのは賢いやり方でしょうか？もちろんそうではありません。ですから、空調が長期間うまく機能するようにすることが必要なのです。」

——サウド・ガニ（Saud Ghani）、カタール大学

John Branch, “Are Qatar’s World Cup Stadiums the Future of Sports in a Warming World?”, New York Times, December 13th, 2022.
https://www.nytimes.com/2022/12/13/sports/soccer/qatar-world-cup-stadiums-air-conditioning.html

“今日の60億人いるわたしたちは、すでに地球の生態系をカタストロフィの手前にまで導いてしまった。2050年には第29回ワールドカップ本大会が開催されるころ、わたしたちは100億人になっている。中国とインドは2006年のドイツ・ワールドカップでは姿を見せなかったが、2050年にはきっといるはずである。そのころ彼らの消費力や競争力は西洋に近づいているだろう。世界の気候システム、生物多様性、水の循環などがどれぐらい耐えられるのか、負荷はどれほど大きいのか、意図したものではないがすでに止めることができなくなってしまった大規模な実験はすでに始まっている。”

–David Goldblatt

David Goldblatt, The Ball Is Round: A Global History of Football, 2006. 引用は中国語版（韓絜光、陳复嘉、劉冠宏譯《足球是圓的：一部關於足球狂熱與帝國強權的全球文化史》，台北：商周出版，2018年）398ページ。

5　再び価値について

『価値論』から

- 見る者はつねに、その奥の方に、さらになにかがあることに、ぼんやりと気づいている（174ページ）

- モノに現在の形式を与えることになった過去の欲望や意志の歴史の存在を認めるというだけではなく、まさにその認識それ自体によってその歴史が新たに活性化され、自分自身の欲望と願いと意志とをつうじて延長するということをも認める（188ページ）

- 貨幣の「目に見えない力」、「他のさまざまなモノに姿を変える能力」（187ページ）

引用はいずれも前掲グレーバー『価値論』。

“「硬貨」は、一時的に循環から外されたときにのみ厳密な意味での「貨幣」になる。つまり、誰かの行為の直接の対象ではなく、行為のためのある種の普遍的な潜在力を表すときにそれは「貨幣」となるのである。それを保持し続けることによって、蓄蔵者は、なんでも買うことのできる力を温存するのである。蓄蔵者にとって貨幣は一種の禁欲的な宗教となり（マルクスはそれをピューリタニズムになぞらえる）、そこでは多くの場合、所有者と、その力の源とのあいだに、強烈に個人的で、秘密主義的でさえある関係が築かれていく。”

–グレーバー前掲『価値論』、166ページ。

6　至人的空間の創出

——産学連携による責任と希望の学問へ

EAA
EAST ASIAN ACADEMY
FOR NEW LIBERAL ARTS

- 2022年度学術フロンティア講義「30年後の世界へ——「共生」を問う」　（UTokyo OCW）

“根源的な中立性”